

セリック(埼玉県越谷市、佐藤郁夫社長)は太陽光に近い光を照射する人工太陽照明灯を開発した企業。宇宙では太陽の影響が探査機にどのような影響があるかが重要だが、宇宙航空研究開発機構(JAXA)は小惑星探査機の「はやぶさ2」は「はやぶさ2」の2代にわたり、評価試験のため同社の人工太陽照明灯を使用した。「はやぶさ2」では搭載機器の作動確認やセンサーの試験で活躍した。

太陽作りたい  
セリックは1984年創業。創業者で現会長の佐藤泰司が中学生のころ、夏休みの宿題で描いた絵が白熱灯と太陽光の下では異なる色に見えることを不思議に思ったのが人工太陽照明灯開発のきっかけ。以来、太陽を自分の手で作りたいと思いつき、ついに会社を設立した。

人工太陽照明灯は自然太陽光のスペクトルや演色性、色温度、照度、チラツキなどを再現する。色彩評価で一般的だった高演色性蛍光灯と比較して太陽光の波長特性に近く、連

続スペクトルのため適切な色の評価ができる。 「人工太陽照明灯S O L A X」シリーズは86年に発売。太陽光の可視光線の波長特性に近いキセノンランプ、光を前に出す反射鏡、可視光線以外を遮断す

## 人工太陽照明灯



人工太陽照明灯と佐藤社長

るフィルターなどで構成する。これまで紫外線や赤外線量を制御するフィルターの導入や大型化などのニーズに対応してきた。 開発当時は太陽光の再現を優先したため用途開発は後からだったという。まずは色彩評価の利用から始まり、自動車整備工場の補修塗装の確認では約1万台以上納めた実績がある。その後、太陽電池の検査や、カメラの評

価などにも用途が広がった。輸出も堅調で全体の3〜4割を占める。カメラの試験や塗料の色の検査などの用途でアフリカを除く世界各国に販売する。太陽光がどのように当てるかを調べるために太陽光と同じ条件下の試験をしたという要望から次第に大学や研究機関からの引き合いが増えていった。 夢は広がる 「はやぶさ2」ではJAXAとの取引が始めたのは98年前後

## 健康維持用途に利用 期待



人工太陽照明灯の部品を組み立て

「ゲットメーカー(TM)の動作検査。「はやぶさ2」は発するフラッシュがTMに反射する光を目印に着陸する。光が目的通りに反射するか「はやぶさ2」の打ち上げ前に人工太陽照明灯で試した。さらに赤外線を用いた自動運転用の測距センサー「レーザーレンジファインダー」の稼働試験でも利用。い

社長の佐藤郁夫は「JAXAのプロジェクトへの参加は社員のモチベーションや社会的な信頼性の向上につながった」という。宇宙スタートアップ企業や、宇宙空間の太陽の再現など新たな顧客開拓にもつながった。今後は「健康維持としての利用を拡大し、安らぎを提供したい」と夢

が広がる。(敬称略)

## セリック

はやぶさ2を作った  
サムライ企業

# 宇宙での機器作動事前確認